

主 題：世の救い主と出会った人々

聖書箇所：ヨハネの福音書4章27-42節

今朝もヨハネの福音書4章のみことばを続けて見ていきます。改めてこれまで一緒に学んできた一連の流れを思い出してみてください。

私たちはあわれみ深いイエス様と水を汲みにやって来たひとりのサマリヤの女が出会った場面を考えていました。一般的に水汲みの作業というのは大変な重労働でした。それゆえ朝や夕方、涼しい時間帯に複数の女性が共同で行うのが当時の一般的な慣習でした。しかし、この女性はだれも来ないような真っ昼間にたったひとりで井戸に水汲みにやって来ていました。それは彼女の罪深い生活に原因がありました。彼女は結婚と離婚を繰り返してただけでなく、今も変わらずに夫でない者と同棲をし、姦淫に姦淫の罪を重ねていたのです。彼女はそんな自分自身を深く恥じていました。また周りも関係を持ちたくないと思っていたからこそ、彼女はいつも孤独でした。

この当時、ユダヤ人から汚れた存在として軽蔑されていたサマリヤ人。そんなサマリヤ人の中でも彼女は特に嫌われていた者でした。この女性ほど救いから遠く離れていると思われる存在はいなかったのです。彼女には何の希望もありませんでした。いつまでも満たされることのない渇きだけがそのうちにありました。まさに彼女は失われた者だったのです。しかし、だれも手を差し伸べようとしない罪深い者に対しても、救い主はご自分の愛を進んで示されていました。まさに彼女のような失われた者を探して、救うために来てくださったイエス様は、渇き切った心を唯一満足させることのできる「生ける水」を与えようとされていたのです。たとえどんなに罪に汚れて墮落した者であったとしても、この方の救いの御手から離れ過ぎている者はひとりとしていませんでした。この方こそあわれみ深い救い主、豊かな恵みを注いでくださる神の御子イエス・キリストでした。

そのような偉大な主とサマリヤの女は出会ったのです。そして次第に、彼女の心は変えられていきました。これまで神様以外のものに満足を見出そうとし続けてきた彼女が、自分自身の罪深さを悔い改めて、主に礼拝をささげたいと望むようになったのです。イエス様はそんなサマリヤの女の心のうちをご存じでした。だからこそ彼女に向かってはっきりとこう言われていました。4：21-23でイエス様は言いました。「：21 イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。：22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。：23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。」と。言われていたことは明白でした。どこで神様に礼拝をささげるのかという場所の問題ではありませんでした。神様ご自身が求めておられる真の礼拝者には、どんな場所であったとしても、「霊とまことによって」ささげる、ふさわしい態度が常に問われていたのです。上辺だけの中身の伴わないものではなく、心の底から気分や感情に左右されるものではなく、いつも真理のみことばに基づいてささげられるもの、この二つの要素が真の礼拝には絶対に欠かせませんでした。以前、拒絶された者の中の拒絶された者であったサマリヤの女。当然、全く主を知らない者でした。しかし、真の救い主に出会った彼女は新しく造り変えられ、神様を礼拝する者となったのです。

○世の救い主と出会った人々

ここまでが私たちが学んできたことでした。4：1から始まったサマリヤの女性との会話は、42節まで続きますけれども、私たちはこれまでに、この大きな一つの場面の約半分を見てきました。この朝は残りの半分、一連の出来事のクライマックスとなる27-42節を考えていきたいと思えます。そして特

に今回はこの箇所を、世の救い主と出会った三つのグループ——サマリヤの女、弟子たち、町の人々——に分けて、それぞれのグループの人たちの姿から読み取ることでできる大切な教えを学んでみましょう。この時間がそれぞれにとっての励ましと、さらなる成長の助けになることを心から祈っています。

では、まずはみことばをお読みします。

ヨハネ4：27-42

「:27 このとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話しておられるのを不思議に思った。しかし、だれも、「何を求めておられるのですか」とも、「なぜ彼女と話しておられるのですか」とも言わなかった。:28 女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った。:29 「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのではないでしょうか。」:30 そこで、彼らは町を出て、イエスのほうへやって来た。:31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生、召し上がってください」とお願いした。:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」:34 イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。:35 あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。:36 すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。:37 こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。:38 わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」:39 さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。:40 そこで、サマリヤ人たちはイエスのところに来たとき、自分たちのところに滞在してくださるよう願った。そこでイエスは二日間そこに滞在された。:41 そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。:42 そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」

1. サマリヤの女 27-30節

最初のグループはサマリヤの女でした。みことばは27節からこう続いています。「:27 このとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話しておられるのを不思議に思った。しかし、だれも、「何を求めておられるのですか」とも、「なぜ彼女と話しておられるのですか」とも言わなかった。:28 女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った。:29 「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのではないでしょうか。」と。弟子たちもこの時、当時の人々と何ら変わりありませんでした。イエス様のために食べ物を買出しに出て行き、帰って来た彼らの目に飛び込んで来たのは、自分たちの主人がサマリヤの女性と会話をしている、そんな場面でした。

▶「不思議に思った」

そしてその場面を見た彼らは、「不思議に思った」わけです。「不思議に思った」というのは、何も単純に「何かおかしいなあ」、「不思議だなあ」と首をかしげているような姿ではありません。「不思議に思った」と訳されているこのことばには、もともと何かに対してひどく驚く、動揺するといった意味が含まれていました。これと同じことばは、新約聖書の中にほかにもいっぱい出てきますけれども、その一つは湖で大嵐を静めたイエス様の力を目の当たりにした場面にも使われていました。マタイ8：27に「人々は驚いてこう言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」」とされています。そうすると、想像できますか？弟子たちの持っていた驚きというのは、小さなものではありませんでした。目の前の光景が余りにも信じ難いものだったので、彼らは口を開くこともできずに、互いに顔を見合わせながら驚きの表情を浮かべていたのです。

●当時あった様々な掟や格言

でもそれほどまでに、ユダヤ人のイエス様がサマリヤ人の女性に対して話をするというのは、社会的にも、文化的にも到底考えられないことだったのです。実際、当時のイスラエルの教書の中にも、こんなおきてや格言がありました。「通りで女性と、たとえそれが自分の妻であろうと、話してはならない」とか、「男が女性との会話を長引かせるたびに、彼は自らに災いをもたらし、律法から遠ざかり、遂にはゲヘナに落とされる」とまで言われていました。この時代の慣習、基準からしてみれば、人前で女性と話すということは、もう全くもって考えられないことだったのです。人々の間では深刻な悪とさえ見なされているようなものでもありました。でも、そんなことはイエス様には全く関係なかったのです。罪人を救うために来てくださった救い主にとって、そのような社会のおきても、常識も、そんなものはどうでもよいものでした。イエス様の大きな愛というのは、それが性別であれ、人種であれ、文化や社会的な立場の異なる者であれ、確かにあらゆるものに対して例外なく、分け隔てなく示されました。救いの御手から遠く離れ過ぎているような者はいなかったのです。

こうしてサマリヤの女は主と出会い、この主の深いあわれみを個人的に知りました。そしてそれを知ったからこそ、彼女の心は文字どおり大きく変えられていました。というのも、救い主と出会って変えられた彼女は、次の瞬間、自分に「生ける水」を、救いをもたらしてくれたお方を宣べ伝えようとして町へ出て行ったのです。28節をよく見ると細かい描写が記されていました。「女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った」とあります。サマリヤの女は水を汲むために井戸まで来ました。そのために必要だったから水がめを持ってきたのです。でもその水がめをそこに置いて、町に戻って行ったのです。いったいどうして彼女は水がめを置いたままにしたのでしょうか。具体的な理由はここには記されていません。ゆえに、ある注解者たちは彼女がこの驚くべき出来事、体験を、急いで人に知らせたいと願ったのではないかと考えていますし、またある者たちは「水を飲ませてください」と頼んでいたイエス様が、それを飲むようにと置いて行ったのではないかと考えています。いろいろな考えはあります。でも少なくとも言えるのは、実際に渴きを覚えて、水を求めて井戸にやって来た彼女の心は、主にあって変えられていたということです。満たされることのない渴きを心にずっと覚え続けていた彼女は、「生ける水」と出会い、「生ける水」を味わい、本当の満足を手にしました。渴きが潤されたからこそ、彼女の関心は実際の水よりも「生ける水」を与えることのできるお方、キリストを伝えることに移っていたのです。

そして、ここで一つ、この彼女の姿から私たちが学べる大切なことがあります。それは神様にはどんな罪人であろうと新しく造り変えて、ご自身の証し人として十二分に用いることができるということです。自分のこととして考えてみてください。伝道の話になると、時に私たちは自分にはなかなかできないと、思ってしまうことがあるかもしれません。聖書の知識や神学をたくさん知らないような自分には、だれかに具体的に福音を上手に伝えることは難しいですとか、個人伝道することに対しても、どんな順番でみことばを伝えれば良いのか勉強しないといけません、まずはそのためのクラスを受けないと不安ですと、考える人もいるかもしれません。そしてもちろん私たち自身が聖書を深く学んでいくということも、福音の真理をさらに知って伝道の備えをしていくということも何も間違っただけではありません。それらは当然欠かせない重要なことです。別のみことばもはっきりとこう述べていました。Iペテロ3：15に「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。」と書いています。ですから私たち自身が用意することは重要なことでしたでも同時にいつも忘れてはならないのは、私たちの豊富な知識や巧みなことばが人に救いをもたらすのではないということです。

イエス様と出会って変えられたサマリヤの女。彼女はいったい何を知っていたのでしょうか。神学や聖書を数多く知っていたのでしょうか。正しい伝道の方法、仕方を知っていたのでしょうか。いいえ、彼女はそれらを何も知りませんでした。救い主と出会って、まだ数時間も経っていませんでした。彼女には、それでもわかっていたことがありました。キリストが自分のうちにあるすべての罪をご存じである

ということ、そしてそんな罪深い自分にさえ恵みによって救いを与えてくださるということでした。たくさん知識を持っていたのではありません。彼女はただ自分の罪を認めて、キリストこそが自分の救い主だと心から信じ、キリストが自分に対してなしてくださったことへの喜びの応答として、ほかの人にもキリストを伝えようと思いました。神学者としてではありません。ただ主のあわれみを個人的に知った証人として、大胆に語っていたのです。「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです」と。想像してみてください。彼女にとって、町中で人々にあかしするということは、果たして容易なことだったのでしょうか。自分の過去を知っている者、いやそれ以上に過去のことを知っていて自分を軽蔑し、関係を持ちたくないと思っているような者のところに行くことは、容易なことだったのでしょうか。私たちならためらいを覚えるかもしれません。ほかの人には喜んで伝道しようとしたとしても、自分のことを忌み嫌って、自分の話を聞こうともしない、自分に耳を傾けようとしないうような者のところにはやっぱり行きたくないと思うかもしれません。でも、サマリヤの女は違っていました。救われた喜びと感謝にあふれていた彼女は、だれであれ関係なかったのです。

しかも、彼女は驚くべきことを口にしていました。29節をよく見ると、彼女は「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです」と言っていました。39節には「**「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のこと**によって」と書いてありました。思い返せば、姦淫の罪を重ねていたサマリヤの女は、以前は自分自身の罪というものを、汚れというものを恥じていました。自分の罪深さを何とか隠そうとして、罪悪感から人の目を避けて、だれとも関係を持つともしませんでした。多くの人たちが避けるような一日で最も暑い、だれも来ないような真っ昼間に、ただひとり井戸にやって来ていたのもそのためだったのです。でもそんな彼女が人々のもとを訪れて、自らあかししていました。ごまかすこともなければ、正当化することもなく、ただ隠すことなく告げ回ったのです。「来て、見てください」と。私が過去に犯したこと、皆さんもご存じでしょ？私が過去に犯した罪も、私がこれまでに隠れて行ってきた罪も、そのすべてを自分に言った人がいるのですと。以前、関係を持った人たちのこともみんな知っているし、だれにも言えないような自分の恥ずかしい生活、そのすべてを知っているし、私の罪深さも文字どおり全部知っている、そんなお方がいるのですと。彼女は何も隠しませんでした。そしてそんなすべてをご存じでおられるお方が、私を決して見捨てることなく、大きなあわれみを示してくださいましたと言うのです。私のような罪人には到底値しない、罪の赦しを、救いを、恵みによって与えてくださいましたと。だからどうか皆さんも来て見てくださいと。町の人たちから何を言われるのか、不安を抱いてもおかしくありませんでした。自分の罪深さをもう知っている者たちに、自分の罪深さを素直に全部伝えたら、それを聞いた者たちからますます白い目で見られて、今まで以上にだれからも相手にされなくなることを恐れたとしてもおかしくありませんでした。私たちだってそんな不安や恐れを抱くことがあると思います。みことばを伝えれば、キリストを伝えれば、家族や友人たちと関係が悪くなってしまうかもしれない、自分のことを白い目で見られるかもしれないと。彼女はこれまでも孤独でした。そしてこれをするによって、さらに孤独になる恐れもありました。でもすごいのは、彼女のその心が自分自身の罪深さを覚えて、そんな自分に対して示されたキリストの愛にだけ向いていたからこそ、彼女は恐れや戸惑い、ためらいを抱くことはなかったのです。彼女の心はただあわれみ深いキリストへの感謝であふれていました。それゆえにそのあわれみ深いキリストに、ほかの人々の目を同じように向けることだけに関心を払っていたのです。

また加えて、サマリヤの女は高慢な態度でそれをなそうとしていたのでもありません。自分を遠ざけてきた人に、少しでも仕返しをしようとして、キリストを語ることをしぶったり、あなた方が知らないそんな存在を、仕方ないけど教えてあげましょと、上から目線で語ることもしませんでした。彼女がどれほど罪深い存在なのか、ほかの人たちもよく知っていましたが、彼女自身が一番わかっていたのです。自分が何者であるかをよくわかっていた彼女は、あえて人々に問いかけていました。29節の最後、「この

方がキリストなのでしょうか」と。彼女が確信を持っていなかったのではありません。彼らに問うたのです。私などより皆さんの方がよくわかるでしょう、この方がキリストだと思いますか、来て自分の目で見てくださいと。

そしてその結果、興味を持った人たちが、ひとりまたひとりとイエス様のもとにやって来ることになったのです。30節に「そこで、彼らは町を出て、イエスのほうへやって来た」と書いていました。改めて考えてみてください。私たち自身はこのサマリヤの女のような証人として、今歩んでいるでしょうか。神様の愛というものを、神様が示してくださったあわれみ深さというものを個人的に知っている者として、それを伝えなくてはいけない、神様の愛を何より宣べ伝えたいと願っているでしょうか。キリストがなしてくださったみわざを喜びながら「来て、見てください」と、キリストに目を向けさせようとしているでしょうか。忘れてはいけません、神様にはどんな罪人であろうと、新しく造り変えることができ、ご自身の証し人として十二分に用いることができるということです。イエス様と出会った女は変えられました。すべての者から忌み嫌われていたそんな彼女を、神様は大いに用いられたのです。

2. 弟子たち 31-38節

次に、二つ目のグループを考えてみましょう。二つ目に登場する人々は弟子たちでした。31節のところからこのように続いています。「:31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください」とお願いした。:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」と。サマリヤの女が町に戻って行った後、買い出しを終えて帰って来た弟子たちは、買って来たものをイエス様に食べてくださいと勧めていました。長旅で、空腹を覚えて、疲れ果てていた自分たちの主人を気にかけて彼らは、自分たちも大きな疲労を覚える中で、懸命に町まで買い出しに行ったのです。しかし、そんな彼らが差し出す食べ物の前に、イエス様は「わたしには、あなたがたの知らない食物があります」と言われました。これを聞いた彼らは、当然のように混乱しました。お腹を空かせた主人のために、彼らはわざわざ町へ買い出しに出かけて行っていたのです。だから弟子たちは頭をかきながら、顔を見合わせて互いに言うのです。いったいどうなっているのでしょうか。だれが主人に食事を持って来たのでしょうか。あなたが先に持って来たのですか、あのサマリヤの女が持って来たのでしょうか。私たちの知らない食べ物があったのであれば、どうして私たちは買い出しに行ったのでしょうか、弟子たちはとても困惑していました。

そして、そんな困惑している弟子たちに、イエス様は大切なことを語られるのです。続く34節に「イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」と」言われています。イエス様はこれまでに取ってきたのと同じ方法をここにも用いていました。実際にもう一度母の胎に戻るのではなくて、霊的に新しく生まれることを教えたニコデモの時のように、実際に飲む水のことでなく、霊的に渇きを潤す「生ける水」を与えたサマリヤの女の時のように、ここでのイエス様の焦点は実際の食べ物ではなくて、霊的な食べ物に向けられていました。そしてこれは私たちにイエス様が常に持っていた優先順位というものを教えてくれるのです。私たち、お腹が減ると、元気や気力がなくなります。お腹が空いている時は、イライラするかもしれませんし、目の前のことよりも後に食べる食事のことに気が取られてしまうかもしれません。礼拝の後のランチに心がとらわれることもあるかもしれません。ここでの弟子たちはまさにそうでした。お腹を空かせていた彼らの焦点は、実際の食事にあったのです。でもイエス様は違っていました。イエス様も確かに空腹を覚えていました。からだも疲れ果てていました。しかしその中であってなお、イエス様のことを変わらずに満たして、イエス様に活力を与え続けていたものがあったのです。それこそが自分を遣わせた方——父なる神様のみこころを行うことだったのです。イエス様に実際の食べ物が必要ななかったという話ではありません。人として来られたお方は私たちと同じように、実際の飢え、渇きを満たすことも大切でした。でも忘れてはいけないのは、どんな時であろうと、イエス様の関心は地上のことではなく天に向けられていたとい

うことです。イエス様にとってみこころに従順に従っていくということに勝る喜びはなかったと言うのです。

イエス様が40日の間、荒野で悪魔の試みを受けられた時、悪魔に対してこう答えられていました。マタイ4:4で「イエスは答えて言われた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」と。イエス様はこの地上での歩みにおいて、最初から最後までみこころをただ知っていただけではありません。それを忠実に行って、そのみわざを成し遂げて栄光を現そうとしました。だから十字架を前にした時に、イエス様はこんなふうに祈ることもできたのです。ヨハネ17:4でイエス様は「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」、こんなふうに祈っていたのです。果たして私たち自身は、みこころをただ知っているだけでしょうか。それとも知っているだけではなくて、そのみこころに従順に従い続けることを己の喜びとしているのでしょうか。イエス様が言われていたこと、イエス様がなされていたことは、ただみこころを知っていただけではありません。時々みこころに従ったのでもありません。イエス様は最初から最後までみこころに従い続けました。果たして私たちはそのように歩んでいるのでしょうか。それとも常に地上のことに心が囚われているのでしょうか。ペテロもかつてこう言いました。Iペテロ4:2で「こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。」と。

でも、イエス様の弟子たちに対する教えというのは、これですべてではありませんでした。続く35節から、「:35 あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。:36 すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。:37 こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。:38 わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」と書かれています。いったい何を言わんとしたのでしょうか。思い返してみてください。この時、イエス様と弟子たちはスカルというサマリヤの町にいたのです。ちなみにこのスカルは穀物で有名な地域の中心でもありました。この場所ほど農業が盛んで、畑が豊かに実っているところはほかにはないと言っても過言ではない、そんな良いところでした。そしてそんな場所にあって、イエス様は周りを見渡ししながら、弟子たちに強く訴えられていたのです。目を上げて、周りを見渡してみなさいと。畑は色づいていて、刈り入れの時を待っています。これらは成長して収穫するのに4か月かかると言われています。でもサマリヤは、今こそがまさに収穫の時なのだ。これも実際の話に焦点が置かれていたわけではありません。それ以上に霊的な話がなされていました。通常の農業であったとすれば、種蒔きから収穫までの間には待ち時間というものがかかるものでした。でも、この立ち寄ったサマリヤでは違っていたのです。サマリヤの女にしても、この時には町の人々までもがイエス様のもとに次から次へとやって来ていました。福音のことばを、救いを必要とする者たちでそこはあふれ返っているのだと言うわけです。

弟子たちは、最初そんな状況は知る由もありませんでした。サマリヤの町に立ち寄ったその時には彼らは間違いなく思っていたでしょう。どうしてこんな嫌われたような者たちのところを通らないといけないのでしょうか。この町の人々にイエス様のことばなど必要ありません、神様から遠く離れてしまっている、このような者たちが救われるはずもありませんと。必要な食事だけ、必要な休息だけ取ったら、さっさとこの場を立ち去って行きましょと。それだけ人目には不可能にも思えるような場所でした。でも、神様のご計画は違っていたのです。サマリヤを通過して行かなければならなかったと。あわれみ深いイエス様は、ひとりの女性を通して、この地にも救いをもたらされました。

続く39節に「さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。」と書いています。すごいと思いませんか？収穫を待っていたその地に足りなかったのは、イエス様のことばでした。人々はただ救い主に会うことが必要だったのです。そしてこれは今の時代も何ら変わったわけではありません。イエス様はこんなことを言われていました。弟子たちに向かってマタイ9：37-38にこう言われています。「：37 そのとき、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。：38 だから、収穫の主、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」と。問題とされていたのは、収穫があるかないかという話ではありません。問題は、収穫は多いのに働き手が少ないということでした。私たちも恵みによって救われているのであれば、今、イエス様のことばを伝える働き人のひとりです。そして私たちの周りを見渡してみれば、キリストの福音を必要としている失われた者たちであふれ返っています。だから私たちに与えられているそれぞれの責任は、働き手が増し加えられますようにと真剣に祈ることだけではありません。全世界に出て行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさいと言われていた主のみこころに従って、喜んで伝道していくということです。別の機会を待つのではなく、今こそが収穫の時だ、働きに忠実であるようにと、それが、イエス様が弟子たちに対して求めていたことだったのです。

3. 町の人々 39-42節

そして最後に、三つ目のグループとして登場するのは、町の人々でした。39節からこのように締めくくられています。「：39 さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。：40 そこで、サマリヤ人たちはイエスのところに来たとき、自分たちのところに滞在してくださるよう願った。そこでイエスは二日間そこに滞在された。：41 そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。：42 そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているものではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」と。この箇所を読んで、改めてすごいと思いませんか？励まされると思いませんか？すべての始まりは、ひとりの女性のあかしでした。力強く、重要な存在として認められて、道徳的にも正しく、人々から尊敬されていたような人物ではありません。か弱くて、取るに足らない、不道徳で罪深く、人々から忌み嫌われていたような人物でした。彼女のことは人を圧倒させるような迫力もなければ、人を納得させるような巧みな議論もいっさいありません。そこにはただ恵みによって救われて、救い主によって変えられたことへの感謝と情熱だけがありました。神様はそんな名もない女性の素直なあかしを用いて、町の多くの人たちを救いへと導かれたのです。

伝道というのはいつも、私たちのことばの巧みさによってなされるものではありませんでした。それは弱くて足りていない、そんな私たちのうちに働いてくださる神様の力によってなされるものだったのです。例外はいません、すぐれた教師だったパウロも同じように言いました。Iコリント2：4に「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。」と書いています。私たちも同じです。救われた者であれば、私たちは救われた者としていつでもあかしすることのできるすばらしい喜びを持っています。もし語ることに困るのであれば、私たちはいつもこのことを語るができます。キリストを知る前の人生からキリストを知った後の人生、大きく変えられたことの喜びを語ることです。神様が自分に何をなして下さったのかということ語り続けることです。自分に目を向けさせるものではありません。キリストが私のようなものになして下さったことを知ってくださいと。最初、町の人たちはこうやってサマリヤの女性のあかしを通して、救い主のもとへと導かれていきました。でも同時に、このサマリヤの女性のあかしというのは、単なる入り口にすぎませんでした。彼女のあかしのことばというのは、それ自体で終わるものではなく、彼ら自身をより偉大なことばへ結びつけるものだったのです。だからはっきりとみことばにも言われていました。イエス様のもとにやって来て、イエス様と個人的な時間をともにした彼らはどのようにして信じたかと言うと、

4 1 節に「さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた」と書いていました。またその続き 4 2 節にも「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」と書いていました。だからこそ私たちの救いのあかしは、確かな力を持っています。キリストがどのようにして自分を変えてくださったのかということ伝えていくことは、人々を救い主のもとへと導く大きな助け、大きな入り口になります。でもあくまでもこれは入り口であって、福音を伝えることと同じではありません。私たちは自分たちのあかしの上にだれかの信仰の土台を築いてほしいのではありません。だからこそどんな時も、どのようにして変えてくださっただけでなく、みことばから救い主イエス・キリストがどのようなお方なのか、そしてそのことばを伝え続ける必要があるのです。町の人たちはサマリアの女のあかしを通してイエス様と出会って、そしてイエス様から直接ことばを聞いて、その方を心から信じました。この時の彼らはどんなに大きな喜びにあふれていたでしょう。当時のユダヤ人の考えからすれば、サマリア人というのは救いから遠く遠く離れていた存在でした。しかしあわれみを受けた女性と同じように、彼らも同じ救い主の大きなあわれみを受けました。彼らは知ったのです。この方こそ本当に世の救い主だと。世の救い主であられるイエス様の愛は、あらゆる者に対して、性別も、人種も、文化や社会的な立場も関係なく、すべての者に分け隔てなく示されたものでした。この方の救いの御手が届かない、そんな罪に汚れ過ぎているような者は、ひとりとしていなかったのです。

そして感謝なことは、この事実は今も変わっていません。だからもしまだこの中に、この救い主を知らずにかたくなに神様に逆らい続けている人がいるのであれば、どうかこの救い主のあわれみを求めてください。この方の前に自分自身の罪を悔い改めて、そしてこの方を救い主として、主として信じ受け入れてください。「生ける水」であるイエス様にある本当の赦しを、満足を、どうかあなたも知ってください。私たち罪人のためにこの世に来てくださった救い主、この方はだれよりも偉大なお方でした。どうでしょう？ 私たちは何よりもそんなお方をあかしする者として歩んでいきたいと思っているのでしょうか。どれだけ大きな愛を受けたのかということ、どれだけかたくなだった心を神様が変わてくださったのかということ、その主の偉大なみわざを個人的に知った者として、それをまだ知らない者に伝えたいと願っているのでしょうか。私たちの救い主がどんなに偉大なお方かということ、いつも思い出し続けることです。

最後にウィリアム・バークレーもこんなことばを残していました。「イエスは、神からの言葉を伝えるために来た単なる『預言者』ではありません。人の心を見抜く不思議な能力を持つ単なる『心理学者』でもありません。確かに、サマリアの女とのやり取りにおいて、そのような能力を明らかに示されましたが、それ以上のものを示されました。イエスは単なる『模範』でもありません。人々に「こう生きるべきだ」と道を示すために来たものではありません。偉大な模範も、それに従う力が自分にはないことに気づけば、それはただ人を落胆させ、挫折感を与えるものとなるでしょう。イエスは『救い主』でした。人々を邪悪で絶望的な状況から救い出し、過去に縛りつけていた鎖を断ち切り、未来へと向かう力を与えました。サマリアの女は、事実、イエスの救いの力の素晴らしい例です。彼女が暮らしていた町の人々は、間違いなく、彼女が更生不可能な人物と見なしていたでしょう。彼女自身もまともな生活を送ることはできないと思っていたでしょう。しかし、イエスは来られ、彼女を救われました。過去から解放し、新しい未来を開かれました。世の救い主ほど、イエスを表現するのに相応しい称号はないのです。」と。この最高の救い主に心を留めて、この方に信頼しながら、主のあわれみ深さを個人的に知った証人として、ますますともに歩んでいきましょう。